



夕焼け通信

2019.12.23 1243号 編集 宮森健次

〒699-0823 島根県松江市西川津町4276-402
miyaken@me.com gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/

手作りのくらし 2 36

木幡智恵美

干し柿 (6)

我が家の干し柿に黴がきてしまった。これは一体どういうことなのか。一回目、二回目とも早い時期で、気温は高かった。その時はできなかったのに、冬に近づいて黴がくるとは解せない。とにかく何とかしなくちゃと、消毒のつもりで焼酎を吹きかけてもみたが、黴はひるまない。それどころか少しずつ広がってきている。そう言えば、Oさんは冷凍したと言われた。こちらはひとまず冷蔵庫に入れ、もう少し寒くなつてから干し直すことにしよう。ペラングに吊るした、生乾きというより熟柿に近い柿をビニール袋に詰め、冷蔵庫の野菜室に入れて、もう少し寒くなるまで待つことにした。

一週間ほど経つた頃、もういいだろうと思い、冷蔵庫から出そうとしたら、熟柿に毛の生えたような柿のことだ、袋の下の方はべちゃべちゃになつていてはなにか。何とかまだ干せるものは吊るし、べちゃべちゃのは干し網の中に入れてペラングに吊るした。

気温が低くなつたからと外に出したのも大失敗。すぐにコバエが寄つてきて、透明の汁が滴る柿に群れてきたのだ。黴の次はコバエかい。干し網の中の柿はもうどろどろの汁と化し、救いようがないので捨てるしかなかった。紐に残つていゝものは部屋の中に入れ、床に新聞紙を敷いた上に吊るした。新聞紙はすぐにべちゃべちゃ。次の日には、部屋にもコバエがやつてくるので、扇風機を強にして一日中かけた。コバエは見つけ次第、一匹ずつ退治していく。が、黴は増えていくばかりだ。黴がひどいのは、紐から外し、黴のついた部分を削って冷凍庫に入れていく。その数は日に日に増え、三十を超えた。結局、残つたのは三十ばかり。それでも、その後何とか持ちこたえ、干し柿の体裁をとどめている。

そして、冷凍した生乾きの柿はというと、二十年近く作り続けているカスピ海ヨーグルトに入れ、ジャム代わりに食べている。でも、毎日だといひ加減飽きてきたなあ。

K先生は、小学校一、二年生の時の担任である。ここに寄席が新聞の一面に出たことで先生の目にとまり、そこにあつたぼくの職場に、「今さらと思つたけどね、なんかあなたの名前は覚えていてね、思い切つて出したわね。」という葉書が届いたのだった。そのおかげで、ぼくはK先生の部屋でお茶をいただいている。葉書を読んで、すぐにでも訪ねたいと思つたのだが、用事のある週末をいくつか過ぎてしまふと、徐々に腰が重くなつた。ぜひお目にかかりたい、などと返事を書かなければよかつたと後悔するほどに。これは、社交性を欠く元来の性情が顔を出してくるため、いつもねじふせるのに苦労する。

「女学校出てから、浜田の師範学校に行つてね。そこじゃあ、作業ばかりしちよつたね。だから勉強あんまりしてない。教員になつた年に終戦だった。」

足こそ不自由だが、ぼくは声を大きく必要もなく、会話は何不自由なく続く。K先生の前歴を初めて知る。小学校低学年に語られるはずのない話ではあるのだが。

ぼくが教わつた後、同じ学校で再度一、二年生

を担任して退職されたのも初めて知つた。「その年から一年延びて、四十六で退職だつたらね。」

「えつ。」

「仕事を持つ夫がいるとそうだった。」

電気ポットの蓋が少し開いている。K先生がそれに気づいてちよつと手こずりながら閉める。「あなたがね、あじさいの花をお家から持つてきてくれたことがあつたでしょう。」

全く覚えていない。

「もつとうまく世話すれば、長持ちさせられたのに、いくらもしないうちに弱らせてしまつて。あれが申し訳なくてねえ。」

建てたばかりの、まだ小さな、内装も完成していない家、今よりずっと日がたつぷり差した裏庭、確かにそこにあじさいが咲いていた。裁ちばさみを手にしたまだ若い母が大好きなK先生に、とほくに持たせたのだった。きつと。

K先生の悔いが今はよくわかる。子どもが覚えていないのは小さい痛みを教師は忘れることができない。思い出したくないのに思い出す。帰りの車の中、K先生を訪ねたことが今年一番の快事、と思えて爽快な気分だった。

30代フリーター やあ、ジイさん。安倍晋三が臨時国会後の記者会見で「憲法改正は、必ずや私の手で成し遂げていきたい」と語ったと報じられている（12月10日朝日新聞朝刊）。

年金生活者 政治生命と引き換えにしてもといった覚悟は感じられず、任期の終わりが近づく政権のレームダック化を避けるための党内向けメッセージと理解したほうがいい。

「私の手で」という言い方は、国民には上から目線に映る。改憲をするのは首相ではなく、国民自身だからだ。それに、安倍政権のもとの改憲には反対が賛成を上回る世論調査結果がある（2019年5月3日朝日新聞デジタル）。

それでも安倍晋三が見えを切って見せたのは、党所属の国会議員に「改憲をやるのは自分の政権のときしかない」と訴えるためと推察される。改憲は自民党の党是であり、所属議員のほとんどはそれを望んでいる。それをかなえることができるのは俺だけだから。

ら、しつかり支えろ、とわが首相は言いたかったはずだ。

この内向きの構えは国民の離反を招く恐れがある。それを阻むのを狙いのひとつとして打ち出したのが事業規模26兆円の大型経済対策だ。これに反発する国民は少ない。おそらく次の衆院選はまた自公の勝利に終わるだろう。

30代 9条に自衛隊を明記して海外派遣を可能する改憲をもくろむ政権にノーマルの一票を投じる国民も多いのではないか。

年金 そんな期待は打ち砕かれるだろう。安倍政権がどんなに改憲に前向きになっても、最後に決めるのは自分たちだということを国民は承知しているからだ。

30代 改憲は安倍晋三の「悲願」だから。

年金 彼のほんとうの「悲願」は自らの権力の維持拡大であり、改憲はそのための手段だ。首相の権力を自らの権力の源泉としている麻生太郎が、安倍4選の口実に改憲を言い出したことが

それを示している。

エリート政治家の家に生まれた安倍晋三は権力の間近で育った。手を延ばせばいつでもそれをつかめる可能性のある環境で成長した。彼にとつて、権力は苦勞して手にするものではなく、すでに自らの手にあるのも同然だった。

このことは彼のアイデンティティを形づくる要素のひとつとなったはずだ。権力を手離すこと、それから遠ざかることは、彼にとつて耐え難いこととなつたに違いない。だから、権力を手離さないこと、それを維持し、拡大することが切実な願ひとなつた。第2次政権を発足させて2年ほどたった安倍晋三に政治評論家の森田実が「一番やりたいこと」を尋ねると「開口一番『長くやりたい』」と答えたというエピソードがそれを物語っている（12月6日Yahoo!ニュース）。

憲法に自衛隊を明記したり、緊急事態条項を新設したりすることは、憲法による国家権力への縛りをゆるめるこ

とであり、安倍晋三にとつては自らの権力を拡大することにつながる。それができなくても、自民党の党是である改憲にやる気を見せ続けることは党内を自分中心に結束させる効果がある。

30代 彼の公私混同グセもエリート政治家の家庭で育つたことで身についたのかもしれない。私的な場である家庭内に公的な立場の人間が頻繁に出入りする政治家の日常は公私の区別をつけるのが難しい。

年金 公私混同は独裁者の特徴のひとつだ。彼は首相になるなら独裁的な首相になるべく運命づけられていたともいえる。官僚にまるで自分の使用人のように「付度」を重ねさせるのも自然なことと考えてきたに違いない。

30代 官僚たちの「付度」は度を越している。

年金 「付度」の露骨さは安倍政権が官僚のコントロールに成功しすぎるほど成功したことを示している。

「官僚主導から政治主導へ」を掲げた民主党政権が官僚のコントロールに

721 ニュース日記 中村 礼治

それでも国民が安倍政権を見限らない理由

失敗して国民の信を失つたのを目の当たりにした安倍晋三らは、それを最大の教訓のひとつとして政権運営に臨んだ。霞が関の幹部人事を握る内閣人事局を新設し、「政治主導」の実行力を国民に見せた。

安倍政権が官僚を掌握していることの最大のあらわれのひとつは、アベノミクスと名づけられた「大きな政府」政策だ。それは財政赤字を拡大する政策であり、財政緊縮派の財務省を抑え

込んでいる証左にほかならない。この路線は景気を下支えして雇用を広げ、国民の多く、とりわけ若い層の支持をつかんだ。

二度にわたる消費税の増税は財務省に押し切られた結果のように見えるかもしれない。だが、それは財務官僚を手なづける手段でもあつたはずだ。とりわけ二度目の増税は、森友・加計学園問題で財務官僚に公文書の改竄という無理な「付度」をさせた見返りという一面があつたと見る事ができる。

30代 このまま政府の借金漬けを放置すると、インフレを招いて国民生活を窮地に陥れるのではないか。国民は心配にならないのだろうか。

年金 マイナス金利が長期にわたって続いている現在は借金をしたほうが赤字を減らせる環境にある。国民はそのことを直観しているし、野党が政権に就いて同じことをやろうとしても失敗する可能性が高いことを承知している。だから、いまなお安倍政権を見限らないでいる。